

# 『新里むかし』

群馬県勢多郡新里村の民話

千葉大学日本文化研究会

民話分科会編

本書は、一九八四年（昭和五九年）十一月一日に、手書き謄写版印刷の民話集の『新里むかし』（群馬県勢多郡新里村の民話）として発行された民俗調査報告書をリポジトリ公開用に活字化した覆刻版です。

本書を作成するにあたり、あきらかな誤字脱字等を修正したほか、漢字とひらがなの使いわけ、および句読点の位置の変更等をおこなっています。また、誤読しやすい部分には、ルビ・注釈などを付け加えたほか、地名・住居表示などは、調査当時のまま表記しました。なお、現代では不適切な表現と思われる文章表現等については、当時の執筆者および話者からの採話を尊重して、そのままの言葉遣いで掲載してあります。

## はじめに

## 解説

みなさんは、民話を本で読みますか。それともテレビで見るとですか。私達は民話を聞きました。それも、眼の前で語られる、人間の生の声なまを。何か、その「語り」に見えない魅力があるのです。聴いているだけで、自然と笑いが出たり、妙に怖くなったり。何とも不思議なものです。画面もないのに、いやに現実感、奥行きがあるのです。

そんな体験をして、私達が集めたものが、この民話集『新里にいさとむかし』(群馬県勢多郡新里村の民話)です。語られたままの生の民話をみなさんに知っていただきたいと思って作りしました。これを読んでいただいて、語られる話に魅力をもってくださいれば、こんな嬉しいことはありません。最後に、調査にあたって私達をあたたく迎えてくださった新里村の皆様感謝するとともに、心からお礼を申し上げます。

一九八四年爽秋の日

千葉大学日本文化研究会 民話分科会一同

夏の四日間の調査をとおして、新里村で採集できた話は、民話四話、伝説二〇話、世間話九話の計三十三話でした。話者は、五十六歳から八十五歳までの男女十四名で、一人で八話も語ってくださいました人もいますが、一人当たり平均二〜三話を聞くことができました。

「猿むこいり」は典型的な異類婚姻譚こんいんたんですが、「娘の蛇退治」は、娘が針で蛇を殺すという「蛇むこいり」のモチーフをもちながら、村のために蛇を退治して庄屋の息子のもとへ嫁ぐというかたちになっています。

「小沼伝説」このは、本書には八話掲載しましたが、他の多くの方々からもあらずじを聞くことができました。赤堀道元は隣の赤堀村の人ですが、新里村全体にこの伝説が分布しているといつてよいと思われます。

世間話というのは、昔話のような形式をもたず、伝説のように信仰的基盤にもよらない実話または体験談の形で話

されるものです。きつねや蛇など、動物に関するものを多く聞くことができました。

調査での私達の力不足もありましようが、多くの話を採集できなかったのは残念です。

## 新里村について

群馬県勢多郡新里村<sup>にいさと</sup>は、県東部、赤城山の南麓に位置する農村です。東西約四・五km、南北約十五kmと南北に長く、面積は約三十六km<sup>2</sup>、北端の標高は一四四六m、南端は一三二mです。農用地は、全面積の三十八%を占め、村の基幹産業は、養蚕、水稻、酪農などの農業ですが、桐生経済圏に立地し、近年の人口急増にともなって都市化が進んでいます。

人口は昭和五十六年現在、一一四九九人、昭和四十七年

以来増え続けており、特に新川東南部はベッドタウンとして開発がすすんでいます。

産業別就業人口も、昭和四十一年に第一次産業が約三分の二をしめていましたが、昭和五十五年には三分の一になり、第二次、第三次産業と同率になっています。

村内には数多くの旧石器時代からの遺跡や、史跡があり、長い歴史を感じることができます。国指定重要文化財の塔婆（八〇一年建立）、県指定史跡の山上城跡などの文化財だけでなく、村のあちこちで庚申塔や道祖神も多く見られました。

現在の村は、明治二十二年に十一カ村が合併して誕生しました。桐生と前橋を結ぶ上毛電鉄が村を横切っており、交通の便も不便ではありません。経済的、社会的に変貌していく過程にある、日本の都市近郊農村の典型といえるでしょう。

## 編集にあたって

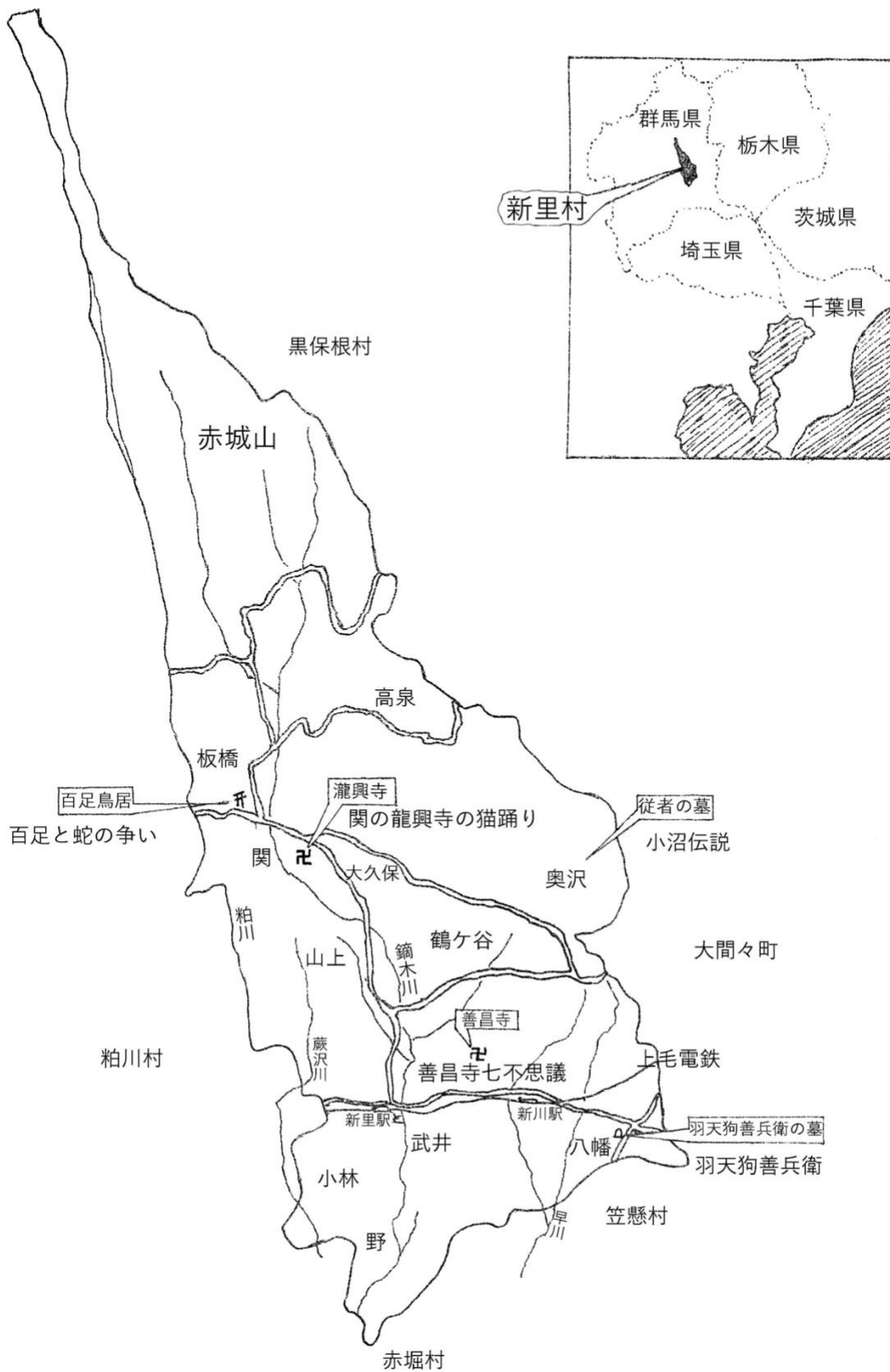
この民話集に収められた民話は、一九八四年（昭和五十九年）七月に、群馬県勢多郡新里村で採話されたものです。ただし、三月に行われた予備調査の折に採話された話で、必要と思われるものについては、補遺として巻末に載せました。

話は、村の皆さんが語ってくださるのを直接テープレコーダーにおさめ、再び文字に直したものです。文字化にあたっては、できるかぎり原音に忠実であるように心がけましたが、極端にわかりづらい場合には（ ）を付して、読者の便をはかりました。また、録音状態が悪く、文字化が困難であったため、あらすじだけになったもの、村の方々が語ってくださった地元の民話冊子に出てくる話など、必要と思われる話は前記の話と同様、補遺として巻末に載せました。

話の配列につきましては、おおよそ昔話、伝説、世間話

の順になっており、題名は編者が便宜的につけたものです。私たちの力不足のゆえ、誤記等があるかと思いますが、ご了承ください。

# 新里村の全体図



もくじ

はじめに	二	(八幡)	一五
解説	二	(奥沢)	一六
新里村について	三	(山上)	一七
編集にあたって	四	関の瀧興寺の猫の踊り(山上)	一八
新里村の地図	五	竜源寺裏のむじな伝説(山上)	二〇
【新里村の民話】カッコ内(話者の居住地区名)		山門の御礼(山上)	二一
猿むこ入り①(山上)	八	小山の由来(山上)	二二
尻ひり女房(山上)	一〇	忠治の首を洗った井戸(山上)	二二
娘の蛇退治(山上)	一一	羽天狗善兵衛(八幡)	二三
三びきの蝶(高泉)	一一	八丁じめの御利益(山上)	二四
小沼伝説		百足と蛇の争い(板橋)	二六
(藤生沢)	一二	弘法水(奥沢)	二六
(大久保)	一三	善昌寺七不思議(鐺木)	二七
(鐺木)	一三	きつねの嫁とり(山上)	二七
(山上)	一四	きつねの仕返し(板橋)	二八
(板橋)	一五	ちようちん行列(板橋)	二九
		茶釜ころがし(山上)	二九

雨乞いの話① (山上)	三〇
小豆ばばあ (山上)	三一
むじなつき (高泉)	三一
正直者の話 (高泉)	三二
家の祖先の話 (関)	三二
赤堀の大蛇 (上鶴谷)	三三

【補遺】

入定塚 (八幡)	三四
米とぎばばあの話 (下武井)	三五
きつね火 (赤城山)	三五
歌よみ (赤城山)	三五
こわい夢 (板橋)	三六
夜、爪を切つてはいけない話 (板橋)	三六
オカメ桜の由来 (上鶴谷)	三六
ムジナに化かされた話 (上鶴谷)	三六
きちほうし様 (奥沢)	三七

ムジナに化かされた話 (奥沢)	三七
雨乞いの話② (山上)	三七
庚申様の由来 (山上)	三八
きつねの話 (山上)	三八
きつねに化かされた話 (高縄)	三八
飴を買った幽霊 (山上)	三九
娘の知恵 (山上)	四〇
猿むこ入り② (山上)	四一

【新里村の民話 (話者名と題名)】	四三
-------------------	----

【民話採訪を終えて】

みちくさ (小豆ばばあのこと)	四六
みちくさ (昔話と伝説)	四七
みちくさ (勢多郡の雨に)	四八

【編集後記】

【民話分科会名簿】	五〇
-----------	----

【新里村の民話】

猿むこいり①

(山上<sup>やまかみ</sup>)

おじいさんがね、三人の娘があつて、田んぼに水がかからないで困つてたんですよね。田んぼがひえち<sup>（干あがつてね）</sup>やつてね、稲が伸びなくなつて。困つておりましたら、そこに猿がきて、それで、

「おじいさん、何心配してんの」

つて言うから、

「水がかからなくて困っているんだ」  
つて。そしたら、

「じゃあ、おじいさんのうちに娘が三人いるから、その一人を俺にくれればね、田に水かけてあげる」

つてね、猿が。で、猿にそう言われておじいさんはね、稲が大事だから、

「じゃあ、あげるから」

と言つたら 水をぱつとかけてくれて、稲がどんどん伸びたんですね。

で、おじいさんは家に帰つて、寝込んだわけですよ、猿のところへ嫁にくれるつていうんで。ですから（一番上の娘がきて）、

「おじいさん、どうしたの」

「（・・・聴き取れず？・・・）だけど、猿のところへ嫁にいつてくれ」

そしたら、娘さんがえらくおこつてね。

そしたら、次の娘さんが来て、また同じことを言った。次の娘さんも おこつちやつて、そしたら、三番目の娘さんが言つたんだつてさ。

「どうしたんですか」

つて言つたら、

「猿のところへ嫁に行つてくれ」

（・・・聴き取れず？・・・）心やさしい娘さんで、



「お嫁に行つたる」

つてね。そしたら、

「もち米をもたしてくれ」

つて言うんですよね。

そして、もち米をもたしてやって、猿のところにお嫁さんに行つたわけですよ。そしたら（娘が）、

「おじいちゃんは、うんとおもちが好きだから、もちをついておじいちゃんのところにもつて、里帰りをしたい」

つて言つたんだつてね。そしたら（猿は）、

「そうかい、そうかい」

つて臼<sup>うす</sup>でもちをついてくれて、

「何にいれていこうか」

つて。

「重箱にいれていくと、臭くなるから、臼でしよつていつてくれ」

つていうんです。猿がしよつて、娘がついていつたら、柳のコロコロが、川の端に大きな柳の木があつて、

「おじいさんは、柳のコロコロが好きだから、とつていつてやろう」

つてやろう

というわけですよ。今度は、

「草の上におくと草臭くなるから」

「じゃあ、しよつていこう」

というわけですよ。しよつて（猿が柳の木に）登つたら、

「どこだ」

「ここよ、ここにいい枝がある」

つて、だんだん上に登つていつたら、そしたらおっこつちやつたわけ。

それで猿がおっこつて、臼が上にあがつちやつたから、

つぶされつちやつたですがね。それでお嫁さんは、

「猿が下なり、うすが上なり」

つて、おじいちゃんのところへ逃げて帰つたとき。

すごくおならする娘がいて、それで嫁にいけなかったんですね。

ある人がお嫁さんにほしいっていうんで、くれたら、青くなって細くなって病気みたいになってしまったんですね。それで、お母さんが、

「どうしたんだい」  
って聞いたら、

「今までだまっていたんですが、おならがでたくてね。すると迷惑がかかるんで、おならしないでいる。そのために顔色がわるくなっている」

「じゃあ、そんならいくらしてもいいから、うちはかまわないよ」

「じゃあ、お母さん、柱につかまってるください」  
で、お母さんがつかまってるたら、そしたら娘の大きいおならで、お母さんが飛ばされちゃったんだって。それでね、

「こんな嫁はおけらんない」  
って出されちゃったわけね。

そしたら、しょぼしょぼいききましたら、お婿むこさんも、しようがない、実家まで送っていくわけですよ。一緒に来たら大きな梨の木が道路の端にあつて、梨をもぐ牛だからかひいた男の人がいて、それで、その木が大きくて、梨がとれないでいたみたいね。それで、その、

「どうしたんですか」  
と言ったら、

「梨がいつぱいになっているんだけど、とれないで困っているんだ」

っていったら（お嫁さんは）、

「じゃあ、私がつってあげましょう」

っていったら、木の方に向かって屁を。がばらばらって（梨が）落ちちゃって、そしたら、

「牛をお礼にあげるよ」  
って、そしたら（お婿さんは）、

「こんな働くお嫁さんは、牛一頭買えるような人はいないんだから、こんないいお嫁さんはとても返せない」  
って、家に連れてきた。

## 娘の蛇退治

(山上)

(・・・聴き取れず・・・) 大蛇が出て、村の人が困るんで、庄屋様が、

「誰か、大蛇を退治した人には、なんでもいうこときいてくれる」

それはね、大蛇が出て、村の人を困らせたわけなんですよ。それで、娘さんが、

「じゃあ、私が退治・・・」

そしたら、娘さんが針四本もって、そして沼のほとりに来たら、娘が来たっていうんで、大蛇がみんな出てきて、

娘さんに飛びかかろうとしたら、(娘が)針四本ばあつと沼の中に投げたら、(大蛇は)沈んじゃって、それっきり村の中には出なかつたんだって。

娘さんは、庄屋さんの息子さんのところに嫁にいったんだって。

## 三びきの蝶

(高泉たかいずみ)

蝶ちょうちょう々がね、三人兄弟でね、赤い蝶々とね、白い蝶々とね、黄色い蝶々が、野原であそんでいたんだって。そしてら、ふいににわか雨がきて、それで、すみれとかなんとか、赤い蝶々 赤い花のところについて、雨にふられちゃってしようがないから、一夜の宿をたのんだら、そしたらね、  
「お前さんは、私の赤い花と同じだから、お前さんだけはね、葉っぱの影とかなんとかに雨やどりさせるけど、他の

人はだめだ」

っていうんだって、そしたら（赤い蝶は）、

「自分だけいい思いしても、あとの二人の兄弟が 雨にうたれると飛べなくなるし、どうしようもないから、そういうんじゃないです」

って断って。

そしたら、白い羽根の蝶々が 白い花のところに行ったんだって。そしたらやっぱり、そういうふうにいわれたんだよね。三人が三人ともそういうんじゃない、兄弟 この人がわるくて、この人がよくなったっていうんじゃないから、

「そういうんじゃない、いいです」

って、三人とも苦労しますって、出ていったんだって。

そしたら、おてんとう様が聞いて、

「やれやれ、感心な兄弟だ」

って、太陽が天気してくれた。兄弟仲よくしなけりやしようがないぞって。

## 小沼伝説

(藤生沢)

赤堀の長者の娘がね、赤城がよく見えるとこにね、行ってみたいと言ってね、長者だから、うんと金持ってるからね、おかごか何かでね、それで行ったんだよね。番頭さんなんかもうんと行ったんだよね。長者だからね、金うんと持ってるからね、番頭だって五人や六人いたんだんべね。

それで、女中もいるんだんべね。そんでもって（赤城へ登って）沼へ行って。その水飲みに行くとかいって、そのまま沼へ入っていつちやった、帰ってくんないべね。それから、またちよつと出てきたんだとか言ったね。そんだけど、沼へこう、出てきたんだとね。それでまた、入っていつちやたらしいんだよね。

（娘のまんまだか）蛇になっちまったんだか、よくはわかんないんだよね。まあ、沼の主になっちまったらしいんだよね。まあ、沼へ入っちゃったんで、昔のことで、水を干したら出てくるだんべと思って、そんで 山の土手を、こう、

ひっかいたわけだよ。山のむこうへ出したわけだよ。

それが粕川かすかわだつていう川になったんだね、今。あんな大きな川になった。(番頭や女中さんが土手を切りくずしたんだが、娘は) 出てきなかった。

あの、まあ、番頭か何か、おかごで送つてった人の墓場がたつてるんだつてね。奥沢つていうところにね。まあ、はっきりわからねえんだけど、いっしょに沼の主になつちまつたんだか、それとも、その番頭で好きで、好きだつてんで逃げたという話もあるんだけど、実際は、沼に入つたつてことになつてるんだよね。

### 小沼伝説(この)

(大久保)

一人娘さんがね、いてね、白い蛇が出てきたとかなんかつていうお話でしたよね。どうしても大洞へ行きたいつ

て行つたら、そしたら、小沼の方へ入つて、大沼と小沼と赤城にあるでしょ。で、小沼の方へ入つてね。こう、入つてそれっきりあれだとかつていうんでね。

で、その赤堀の道元というそのうちではね、毎年、その日の命日に行つてね、お供えをあげるんですつてね。あそこへね。そうしますと、どういう加減か、みんなそれが吸いこまれちゃうんだそうですよね。そんなこと語り伝えられています。

### 小沼伝説(この)

(鏑木かぶらぎ)

道元という酒屋の娘が、(理由は)何であつたのかわからないが、(赤城へ行つた)そのときは、一人で行つたんでなくて、かごにのつていったが、いつにまにかいなくなつてしまつたんだつて言つたね。

それで、ほら、大蛇になってあらわれたんだってね。池へ入って、出てきたのが大蛇になった。(娘が)かごの中か  
らいなくなっただんで、(お供の人が)さがしたんだらうね。  
そしたら、蛇になってあらわれたんだってね。

それで、こういう姿になったから、あきらめてくれて  
ね。で、命日には、よくお赤飯をもつてね、沼へそれをも  
つてあげる(お供えをする)か何かすると、すぐ(お赤飯  
が)なくなっちゃうなんてね。

### 小沼伝説

(山上)

大尽様のお嬢様と、お嬢様のもとに仕えている番頭さん  
と恋仲になっちゃって、何とかして二人だけでね、過ごし  
たいということから、何か機会はないかっていうんで、あ  
の、大洞に登りたいというので、それで、おかごにのせて、

家来だか、番頭さんだかいつぱいいて登ったんだそうで  
す。

それであの、ワイワイ遊んで騒いでいるうちに、(お嬢  
様と番頭は)いなくなっちゃったんだそうですよね。それ  
で、(黒保根村の)涌丸わくまるに着物と帯があるっていったでしよ  
う。

そして、その、好きな二人同士で、向こう側に行っちゃ  
ったそうです。(粕川村の)月田かすかわの方から登ったそうですか  
ら、行くときは。それで、東の方へ、あの、黒保根村の方  
へ二人で逃げちゃって、お寺へ行って、かくまってもらつ  
て、それで、そのきれいな着物と帯は、脱ぎ捨てちゃって  
ね、普通の女の人の着物きて、普通の女の人になって、密  
かに暮らしたという伝説があるそうですよ。

小沼伝説

(板橋)

道元という大尽の娘が、おっかな首のところ、すつとココケが生えて、剃っても、剃っても生えるんだと。そうしたら、十六になったら、

「大洞行ってえ」

と言うんで、番頭さんが、おかごにのせてね、それで、連れてったら、

「水がのみてえ」

と言うんで、

「のんでこい」

といったら、ダイソウやったらね、グググウーと小沼、入っちゃったんだって。

そしたら、幾時間たったらね、

「俺、こう姿になっちゃって、家帰れないから、みんな帰ってくれ」

蛇になったてね。

「十六になったら山に行くな」

ってゆったぐらいに、今でもそうですよ。

赤飯ちゃんと、こう詰めて、沼へ放すよ。その娘がね、死んだ、そいつをやってるよ。今、赤城神社へ板橋があつてやってるんだよ。

小沼伝説

(八幡)

昔、あの、赤堀の道元つてところに、道元サンゲンナカサングンてね、あそこ、道元にね三軒大きな屋敷があるんですよね。そのところの娘がね、赤城山に行きたいって、おかごにのって、昔のことだからね、それで大洞へおかごでかついで行ったんですよ。

そしたら、沼を見てるうちに、すーつと中へ入っていつちやったらね、沼ん中へえっちゃったんだって。そしたら、

かごかついで行った人がね、よわっちゃった。

「なんとか、今一回、姿を見せてくれ」

って言ったたら、こんだ、大蛇になって出てきたっていう伝説もあるんですよ。それで、山中の、なんていったか、お寺に、娘の着ていった着物か、なんとか、保存してあるっていう話もききましたね。

### 小沼伝説

(奥沢)

言い伝わっている石碑があるんです。赤堀の、その当時から栄えていたんでしょうが、道元という酒屋の一人娘だったんですよ。その当時だから、旧暦の五月八日に赤城の山開きといたんですがね。

そのとき、(娘が)登りたいって。その当時は、女人禁制っていわれてたんでしょうよ。それを無理に頼んで、それ

で雇い人でしょう、それをおともにつれていったんですよ。沼へいくと、あつというまに沼に入っちゃったんだ。

しばらくして、蛇になって浮かんできて、そういう姿で帰れないから、みんな帰ってくれ、といわれて、(おともものは)とぼとぼ帰ってきて、七人だったでしょうか、それが、すぐその小高くなつたとこなんです、そこまで来て主人にめんぼくなく帰れないっていうんで、自害したっていうんです。

それを気の毒なことだといって、うちの先祖が(石碑を)建てたんだそう。

今でもやってるんだかやってないんだか、今じゃ、虚空蔵こくぞうの沼、粕川かすかわの源流の沼なんです、そこに行っちゃ、赤飯なげこむんだそうです。



小沼伝説

(山上)

赤堀道元が、その年にね、うんと干ばつだったらしいんだよね。干ばつでね、赤城の小沼のすぐそばのもう一つ池があつたらしいんだよね。

で、娘が飛び込んだっていうのは、実際には小沼じゃなくて、ちがう池なんだよね。で、娘が飛び込んだから、娘を助けるっていうんで、土手を切つて、その水をひっぱちやつたわけさね。

で、それが(道元が)ようするに、そのときの殿様だからね、かなりえらい人なんで、何十人も百姓をつれて土手を切つて、それで娘を助けるっていう名目で、その水をひっぱってきて、それで田植えをしたっていう。

これは、真実の、あつた話らしいんだよね。(娘が飛び込んだという)理由になつたことは、うそなんだけども、水をひいたのは、真実らしいんだよね。

娘が飛び込んだのは、桜の咲く時期なんだよね。だから、

田植えというのは、ちよつとおそいんだよね。そういうんだけども、娘が飛び込んで、(道元の領地の)百姓が、田植えができなくて困ってるんだから、娘を助けるって、ようするに、もう死んでるわけなんだけど、だけど、土手を切つて、水をひっぱつて田植えをさせたっていう、それが真実らしいんだよね。

それが、赤堀道元の娘が沼にとびこんで大蛇になつたっていうね。実際には、娘は沼にも入らないし、大蛇にもなつてないから、真実がわかるとまづいわけだよ。どこかに娘を逃したんだろうけれども、(一緒に沼に行つたとされている)番頭と女中を、全部殺しちゃつて、奥沢に埋けちやつたらしいんだよね。で、その奥沢に埋けたのが、この墓なんだよね。

関の瀧興寺の猫の踊り

(山上)

(関にある瀧興寺は今から百二十一年前の十二代尊盛、十三代尊栄という住職がいたとき、いちばん栄えていたという。その頃の話である。)

三毛のオス猫がいたっていうんですね。で、あの猫めというのは、染色体の関係で、トラ猫ならオス、三毛猫ならメスって決まってるんだよね。だから、あの三毛猫のオスっていうのは非常に珍しいっていうことだね。漁師なんか船に乗るときなんか、三毛猫のオスを連れてくつていうと、天候が変わるのなんか教えるつう伝説があるんですね。

それで、瀧興寺に和尚さんが三毛猫と小僧さんと住んでおって、それがあの(・・・原書文字印刷不鮮明・・・)その和尚さんが、手ぬぐいというものを非常に大切にしておって、手ぬぐいは汗が出たときはふけばいいし、下駄の鼻緒が切れたってちょっとそこやぶけば、鼻緒になるしね。

それで大事にしておったんだけども、台所っていうのかね、台所か風呂場の敷居に篠竹を横において、年中手ぬぐいをさげとくわけだよ、そうするとその手ぬぐいが朝になると汚れてるんだって。

「小僧、人の手ぬぐいなんか汚しちゃだめだ」

って言うんだけど小僧は、

「わたし、やった覚えがない」

っていうんですね。

あるとき、和尚さんが遠くの方に おつかいにいったわけさね。それで、帰るときになったら日が暮れちゃって、ほんとに真っ暗になっちゃって、あの手さぐり足さぐりで、まあこっち、お寺の方に向かって来るわけさあ。

そうするつうと、急にあの原っぱが開けて、そこがす明るくなにか今でいえば、ぼんぼりか ちようちんつうんかね、そんなんがっているような明るい草っぱらがある。それで、笛や太鼓が聞こえたっていうんだよね。で、その草っぱらで(和尚さんは)、

「おかしいな、化かされてるんじゃないか」

っていうことで、目をこすってみたっていうんだよね。だ  
けども化かされたんじゃないかって、何匹も何匹もね、猫がよ  
うするに、はちまきしたりほっかぶりしたりして踊りを  
踊ってるつうんだよね、それで踊り踊ってるつうんだよね。

それで、踊り踊ってたんで和尚さんがそばまで行って隠  
れて見てたわけだよね。そしたら、笛や太鼓の音がやんで  
猫も踊りをちよっと休んだわけさね、そしたら、

「今日はどうしたかな、三毛がこないと踊りはもりあが  
らないなあ」

なんてことを言ったらしいんだよね。そしたら、そのう  
ちに猫が一匹手ぬぐいをかぶってかけ足で来たっちゅうん  
だよね。そして、

「どうした、遅いんじゃないか」  
って言ったたら、

「今日、あの和尚さんが留守で、小僧さんが小豆あずきがゆした  
んだけど、その小豆がゆでもって急いで食べたたら舌を焼

いちゃって、それでまあ、やっと来たんだ」

ってことを言ったっていうんだよね。

それで和尚さんが見たら、その小豆がゆを食べて舌を焼  
いたって猫が、自分んちの三毛だっというんだよね。それ  
で、

「三毛が来たんで、また踊ろう踊ろう」

っていうんで、また盛んに踊りを踊りだしたっていうんだ  
よね。それでその和尚さんもそのそーっと見て、また真  
つ暗い道をもどってきたわけですよね。

それで次の日になって、

「手ぬぐいが汚れてるっていうことは、小僧をしかった  
けれど、いや小僧じゃねえや、三毛だったんだから」

っていうんで、その和尚さんは自分の名前を、たとえば尊  
盛なら「尊盛」って自分の名前をかき、小僧なら「小僧」

ってかいて、それでこんだ、新しく三毛って猫の名前をか  
いて、こんど三つの手ぬぐいをさげといてくれたってね、  
そういう伝説。

江戸時代の後期、今からだいたい百七〇八十年くらい昔だと思ふんですよ。大きなむじながあつてね、あの、悪いことをしたためにね、ようするにむじなが化かすとか何とかいうんだよね。真偽のほどはわからないですけど、農家にきてニワトリとか飼つてるものをもつてくわけだよ、食べるために。

一度、罾わなをかけられて足を一本もがれちつたんだよねえ。それなんで三本足のむじなが、罾にかかったんだけど、逃げちゃうわけだよ。逃げてからよけい悪いことするし、それで あのむじなつくつていうんだけど、むじながつくつと方向音痴になるっていうか、一場所と一晚中同じような場所ぐるぐる回っておつて、朝になって気がついてみると思わぬところにいて、それから家に帰つて来たなんてことあるんさね。それで、山上の元町に粕川友造という漁師がいたんだよね。その人がね、

「今夜は俺がむじな退治しよう」

つていうんで、鉄砲をもつてむじなが出るつていう竜源寺の裏に行つて。そしたら大きな石があつたつていうんだよね。で、大きな石に腰をおろしてね、それで、あのたばこを吸つて、昔はキセルだかんね、キセルだもんだから詰め替えるのに石でコチコチとはたいたもんだから、石が結局その石というのがむじなが化けた石なんだよね。

それで 熱(あつ)いもんだから、むじながたまげて 駆け出したつていうんだよね。友造という人は、その当時としては鉄砲の名手といわれたので、ぶつたら(むじなが)大きな声を出して悲鳴をあげて倒れたつていうんだよね。

山門の御札おふだ

(山上)

関の瀧興寺りゅうこうじに山門があつて、山門の前であの赤子をだいて、いつも赤子をだいた女の人が出て、赤子の鳴き声がするわけさね。それで、あるとき、お坊さんが出てきてその女に、

「どうしたんだ」

つてこと聞いたら、

「実は、私、人間じゃなくて蛇で、子供ができたんだけれども乳がでない」

つていうわけさね。それで お寺の山門に魔よけの札が貼つてあるんだよね。

その魔よけのお札ふだが貼つてあるために 中に入ることができないんだけれども、お洗米というのが、お寺にお米をあげてオサゴっていうんだけどね、オサゴというのはそのもらつてきて、家にある米と一緒にまぜてたいて、おかゆにしてたべると乳がでるっていうんで、それが新里には二

つあるんだよね、奥沢の東昌寺と関の瀧興寺ね。

で、オサゴもらいにきたわけなんだよね。それでオサゴもらつて、それを煮て、自分で食べると乳が出るつづう、まあこれ 蛇にたとえてあるけど、実際には人間と同じことだと思ふんだよね。

それで今ではこれ、山門があつて お札が貼つてあるんだけどね、お札は魔よけのお札だから、蛇はそれより中に入れないつづうんだよね。

人間なら直接、庫裏くらへ行つてね、

「実は、こういうわけだけでも子供ができてお乳がでないと困るから あのおサゴをわけてください」

つて言えるわけさねえ。だけど、蛇でもつて 魔よけのお札があるために行けないので、山門の外で待つて、人が出てくるのを待つてたわけなんだよね。

で、ようするに魔よけのお札っていうのは、あらたかだ魔よけにきくんだっていう。早くいえばそういうのを言いたいのと、そのお洗米をもらつてくると 乳がでるんだつて

こと、これ二つをいいたいわけなんだよね。

### 小山の由来

(山上)

榛名山はるなを作るんで、一生懸命やってたんだけど、もう夜が明けてしまうっていうと駄目なんで、

「ほら一生懸命やれ、一生懸命やれ」

っていって、榛名山作ったわけ。それがもうひとつもつこいいけばというと、もつときれいな山になったんだろうね。富士山みたいな山になったんだろうけど、まあ途中で夜が明けちゃったんで、しょうがない、そこへ放り込んで、そこへ小山という山がある。そこにあるんだよね。

ひとつもつことというのは、昔、担いたんでしよう。土を二人でこう入れて、それを夜が明けるまでに作りなさいと神様に言われて、それやったところが、上にいかないうちに、

ここんところで夜が明けちゃったので、その泥をこぼして帰っちゃったんじゃないですか。

そのためにその下の小山というのか、ちゃんとこんもりした、ちっちゃいのがあるでしょう。

### 忠治の首を洗った井戸

(山上)

あのそこに農免道路あるでしょう、中学の東に。あそこ  
の所に、畑越して、藪やぶあるでしょう。フジ山というんです  
けど。そこに忠治の首を洗った井戸というのがあったんで  
すよ。

今は何かね、マンホールになってるね。あそこはね、昔、  
土の道で、水が清水がこう出てて、ちやうど清水が飲める  
ぐらいのね、こういうのがあったんですよね。このくらい  
の水溜りが。忠治の首を洗ったって。

羽天狗善兵衛

(八幡)

(羽天狗善兵衛は)昔の飛脚だったとかなんとかいう話を聞いたんだけどね。それで東京に行くのに一日で行ってきちゃったとかって話。

笠を胸につけてとんでくとその笠、落ちねえなんていう話きいたけど。まあ、足の速い飛脚だったんでしょね、きつと。

この話はよく知らないけれど、困ってる家で正月あ餅つけねえでよわったなんていうと、そうすつと金持ちの家へ破風から入っちゃ盗んできちゃ貧しいうちに配ってやったんでしょ。

【参考】

新川にある無縁仏の供養の碑の碑文

へ・・・ここに祀る無縁仏は永い間当八幡の野に眠っていた。この数十年來人家が増え、開墾と耕地整理のため路傍

に放置され、心ある人が時折香華を手向けるのみであった。

二十三体のうち羽天狗善兵衛こと松井善兵衛は吉田代官所の早飛脚で江戸新川間を一日半で往復したというが、あるとき熊谷在の山中で焚火する山賊に出会い「寒い、寒い」と尻を温め悠然と立ち去った。後日、賊の捕らえられて語るに、股間にのびやかに垂れた長大な一物を見て何もなし得なかったとか・・・このたび地元有志ら一念奮起これら石仏を洗い浄め供養を営みこの地に安置する。願わくは安らかに眠られんことを・・・昭和五十六年三月 有志一同・・・

昔、「カミやまカミ」って言われたんだよね。「カミやまカミ」っていうのは、芝、高縄、後関、天笠、町組、コイツカ そうなってるんですね。六つに山上が分かれていて、その「カミやまカミ」の分かれるになってね、「カミやまカミ」っていつても芝、高縄、後関にそこに限られるんだよね。

そう、ちょうど今の頃だかもしれないよ、お盆の時分だったから。馬、引いてね。赤城草刈って行ってね。んで馬をこう荷はつてくと、片方背中に三つずつ、こうくつつけて、んでそれをエキガというんだね。それが二人で行ったらしいね。馬に乗って。

それでそのときに、頭がチョンマゲの髪が切れて、何ですか、ざんばら髪っていうんか、それで行ったんだね。そんで不動様、あそこの摩崖<sup>まがいぶつ</sup>仏のね、あそこのところに橋がありますよね、あそこのところを横切って、

「おい、頭なんとかしろ」

って。

「なんとかしろたって、切れちゃったんだ」

それで、そこに標飾りを関で今もしてますけどね、とにかく二人がね、行ったんだね。

こう芝、クロカエの境だよ、芝だとか高縄とか、それで馬の横へ立ってね。ここの大標の張つてある、そこ、あれ知ってますか、水引いちゃうやつ、赤と白の。あれの細いのが昔、元結いちゅうのがあつてね、それでね、髪しばつてまあ行つたん。

それからいよいよ現場へ行つて、まあ草刈るんだつちゅう。まあ片っ方は、うちお昼前に来るんだ。それだけ用意ができちゃったんだって。(仕事が終わって)、

「おい、どうしてまだか」

って、返事も何もねえっていうんで、

「こうもねえ、遅くなっちゃうんだし、本当に気楽野郎！」  
って、こう見たんだね。そうしたらば、松の木にこう寄つ



掛かって寝てるんだと。

「こらあ 馬鹿野郎、あきれたもんだ」

って。そんでよく見たら、松の木の上からこの一升樽って  
いうから、こんな昔のあのテレビあたり出てくる酒樽だが  
ね、小さいやつ。あのくらいあったって、蛇がね。ずーと  
引き下がって、その男の上でペロペロって。それ片荷ごき  
ちやって、

「はあ、早く」

って。返事もねえんで見たら、そんな状態なんでびっくり  
しちやって、そのうちに鎌投げたとか、何かぶん投げてよ。  
こうやった、やりとりやって、やっち奴等の所へ。自分の腰がフ  
ラフラしてかなわないからね。それで、奴が気がついたん  
だよ。

「何でっか」

「何だじゃない。早く来い。早く来い」

「はあ」

って、しょうがね。目こさえているんだってね。

「まあ、早くこー」

っていつてね、口が利かなくなっちゃったってね、片っ方  
は。

「いいから来い、来い」

そばにいつたら、

「何だ」

っていつたら、

「今、松からこうつ蛇がきて、チャツチャツとやってる」  
てね。その大将もぶったまげてね、それで二人でせっか  
く刈った柴も、何もうちにもって帰らねかった。早く家に  
来て、

「早くっ」

ってんで、ろくに口も利けなかったらしんだ。

それで、あの「八丁じめ」っていうだけでその標をね、そ  
の境界を。こういう言葉をきいたことありますか。

「八丁じめを超えたらば、そんなことじゃ話は通らない」  
などと。

八丁じめですね。それは坊様拜んでね。ちゃんと関のお寺で今でもやってるけどね。境界、そこからね、疫病神なんかは入らねっちゃ。

後で調べてみたら、元結いで頭を縛ったんというのは、八丁じめのそれがこう縛ってあったところの元結いで、その元結いで頭を縛ったんで、それで蛇が、蛇がおつかなくて、その人に歯向かうことができなかつたんだらうって、そう言われてるんだ。

百足と蛇の争い

(板橋)

百足と蛇がいたんですよ。そうして喧嘩したんつあですよね。その蛇とその百足でさあ。そして喧嘩したらねえ、百足が負けたんかなあ。どちか負けんたんがね。それがその老神の湯に行つてね、湯はいつたら治つたんだって。そ

してその老神の湯は効くんだった。

それで今、その赤城の大沼・小沼に、そこにね、大蛇と百足の今、主が。

弘法水

(奥沢)

弘法水っていうのがあるんだ。ちょうど干ばつの年だったそう。水がなく、村人たちが困っていると一人の坊さんが来て)

「ここ掘れば水が出るから掘れ」

と杖をたてて印をしてつたんだ。水がなくて、わらにもすがりてえようなわけだったもんだから、

「くそ坊主がなにいつてんだか」

と半信半疑で、まあ、掘つたんだそうです。そしたら、そこからコンコンと水が湧き出て、今でも弘法水といってい

ますけどね。

善昌寺七不思議

(鏑木)

① 雨ふり桜

雨が降らない日でも桜の木の下に行くと、そこだけ雨が降ってるってね。雨が降るように露がおちてるってね。地面がぬれてるってね。

② 底なし井戸

いくらかいても、水がかききれないっていうね。

③ 本堂の枕返し

いくら南に寝ても、朝起きてみると北になってるっていうね。

④ ならずのカヤ

何年たってもならないんだって、カヤの実が、うんと

大きいんだけどね。でも今、切ってしまったんだよね。おとしのあたりかね、きつたんだよね。

【※】採話は七話のうち①～④まででした。

きつねの嫁とり

(山上)

目の錯覚ってこういうもんかなという、そういう場合があつたね。

うちの隣の五十ぐらいだったかな、五十ぐらいだったと思うんですよ、隣の人がね。梨木にね、昔はくず屋だったから、茅刈りであれで登ったんだね。朝二時ごろ。

そうしたらばね、男の嫁どりに出くわしたんだね。そうしたら、でっかい車があかりがね、ずつと来て、後ろへスツスススとこつち来て、でっかいのが消えちまうと、

ちつちえのがずっと来て、またある時間がくるとハッと  
でっかいのと小さいのが。

それが馬鹿げていたんですよね。実際は、まあ、二時ご  
ろ朝出ていくんで、粕川村というところと川一重ですから、ここ  
はね。火事があったんですよね。昔は、消防士というのが  
あったんでね。それでタカガリって、こうでかいちようち  
ん、竿つけて先から出て、後のみんな、普通の消防士は、  
こうここへちようちん下げて、そして歩ったん。それが遠  
くで、こうハンナシぐらい向こうでやっいえ、そんできつ  
ねの嫁とりに見えちまう。

今朝、男の嫁どり見たつていうたら、やあ、村じゃ中に  
火事があったんだな、それに出つくわした。

きつねの仕返し

(板橋)

この奥の方に原あるんだよね。そこへおばあさんが畑  
があるんでニカイ(ニカイ?)しよって行ったんだつて。そしたらあの、  
きつねが川の淵に寝てたんだつて。昼寝してたんだつて。

そこへそつと行つて、横へダアーツとやったらきつねが  
飛び上がつて、川の中へ落つこつちやつたんだつて。きつ  
ねが落つこつたら、ようこさ畑へ行つて、まあ畑へ仕事を  
してトウモロコシいっぱい抱えて、それでまあそうしよと  
した。来てみたら、きつねの落つこつた川あたり来てみた  
ら、こうりつばな、えれえ御殿が横になつて、

「まあ、どうぞ。おばあさんどうぞ、おばあさんどうぞ」  
つて言うんで、こつちも上がつていくかな。上がつていっ  
たところが今度、えれえ鬼が出てきて、おつかねえから後  
つて後ずさりしたら、川の中にポコツと落つこつちやつて。  
きつねの落ちた川へ。落つこつた話よ。おばあさんに聞  
かされたよ。

ちようちん行列

(板橋)

ちようちんがね、並ぶんだってよ。はあ、きつねに化かされてるんだからね。ずーつとならぶんだって。それだから逃げてたんでね。

そうでね、山だの川だの変なとこ連れ込まれちゃってね。まあ、気が付いてみると、ほこらの着物はボロになってるんだって。はあ、きつねに化かされたって。

茶釜ころがし

(山上)

茶釜ころがしたって。長い棒持ってな。で、ころがしてころがしてカラカラカーンって音がね、また次こう、また次こうって。それがいい音するなっていうんで、十二ぐらいあるんだからね(隣のおばあさんが十三歳のとき)、昔だ

って、今の人が口だけが達者だから。そうしたらば、背中へ子ども おんぶしてるんだ。んで、

「泣くな、泣くな、おっかねえから泣くな」

んで、道をずつとこう来て橋を、そこを這<sup>は</sup>って上がったんかね。そこまで来て、うちのとば口に、つぶれちやっただね。

「どうしたんだ、どうしたんだ」

って。なんたっけなあ。お千代、千代ちゅうんなたね。

ばあさんが。お千代ちゅうだね。気がついてから、

「どうしたんだ」

って。

「はあつ、いい音がするんで見たら、でえっかい坊主が棒でカラコロンカラコロンって火の玉の茶釜をころがした」

って。それが、茶釜ころがしの実際にあつたかねえかもしれないけど、そんな話を聞いていました。その人から直接聞いたんだから。

雨乞いの話①

(山上)

ガラガラッて、雨乞いしたんだね。その後、今から何年前だったかね。大洞の大沼(おの)っていうんだよね。それ、水かけたのはね。

それでやったね、神社がよに降ふって(…聴き取れず…)。それが灼しやくっていうんでちゃんと雨が降るって、神社の神主も山上城やまかみじょうへ、

「きつと、これ降りますよ」

って。幸いに、いわれたったけどね。

いく年ぐらい前だったかは、この奴等が死んだのは。舟に乗ってね、若い衆だから出ちやっただよね、沼の真ん中の方へ。そのうちに、舟がひっくり返ってとかいって。大騒ぎやってね、うちで区長してた時分だったから、その行って、

「おめえ、若いんだから行って来こ」  
って。人が死んだとかいってね。そのように残っているん

です。出たことがないから、わからないけど。その若い衆が間違まちがって死んじゃったという事実があったんね。泳げる奴が泳いで戻って来たってわけだね、こっちへ。陸へ着く前になって、

「こだったち 大丈夫だ」

と思つて立つた奴が、助からなかった。ずっと自分では大丈夫だと思つても、実際は深かった。半端じゃなかったみたいね。そういう誤算があったんだね。

佐々木信綱が書いたものだったかな、そのような気がしたつけど、村で一番いい娘むすめっていわれたんだけどね、そいつを連れて行つては、子どもか女の子おんなこということとは分るけどね、それで神社のコトリケ島ことりけっていう島があるんですね、こつち沼のここに。そのこつちに碑いしが元もとのところにあるんだよね。

それで、子どもを連れて行くと、そいつは生きてるんだか知らないけど、夜だか昼間だかは、時を、時刻がどうだったかな、ちよつと度忘れしちゃったけども、リュウキュ

ウとお墓の前にね、ちよつとこのくらいにね、お堂の真ん中にこう映るんですよね。

一人の人の姿がスススツと渡って、娘のこう来て。これがなくなっちゃうですよね、娘がなくなっちゃうた。そういう（雨乞いの）人身御供ひとみごくうだったんがね。たぶんそうだと思いますけどね。そのときに子どものこと思ってた歌じゃないかなと思いますよ。

小豆あずきばあ

（山上）

銚木川かぶらぎのあるところで、小豆あずきばあが来るから、夕方おそくなるといけないよ、ってよくいわれたことがあるんですよ。

なんか、小豆をとぐ音が聞こえるんですって。そのおばあさんに連れていかれてしまうから、夕方遅くなるといけ

ないよ、そこ通らないで来いって。

むじなつき

（高泉たかいずみ）

むかし、もうろうとしたような気持ちが変わになっちゃうと、そういうときは、きつねとかむじなとかが眉毛を数えるっていうんだよね。

そしたら変だなと思ったら、すぐつばで眉毛を数えられないようにぬらすと、自分の意識がはつきりしてくる。変になったとき、足元にそういうのがいるっていうんだよね。それをけつとばすと逃げていくとか。

正直者の話

(高泉)

(・・・聴き取れず・・・) 仲良かったんだけど、一人の人が余所(よそ)の所にいき貧乏暮らしなもので出世っていうんだか、自分の生きるための道を(・・・聴き取れず・・・)。一人のひとが、うんと嘘を言ったりなんかして、自分の身をかばう様にして、出世コースたどだったんじゃない。

一人の人が、うんと馬鹿真面目なんだって。それでね、やっぱりに人に出会ったときに これをしてみろっていったら、絶対できないようなんだけど、そういうふうにいわれてたけど 馬鹿正直さ。

そういうのしたらね、かえって嘘でも世渡りする人よりも、そのときは、ぱっと咲くけれども 将来はその真面目一方の人の方が良かったんだとかいってね。

家の祖先の話

(関)

(自分の家の祖先に) 旗本さんだっけけど、旗本代々継いでだなあきたって話聞いたったな。

それで今度、旗本やめて腰元なって、なんつうかな。なんだっけな。まあ早く言えば、用心棒みなのだったと思っただけが、殿様のそばについてさ、歩ってたから。だからよ、それで隠密剣士、ああそうだ隠密剣士だ。それで隠密剣士になれていうんで、流れてここへ、この場所に来たったん。

それから、高利貸したり百姓したりして財産残して、財産もちだったの。何代目って言ったけかな。四代とか五代とかいってたけど、俺も記憶よくねえんだけどさ、なんぼ歴史は古いらしいよ。

拾われたんは、この部落、誰とは言わなかったよね。だからこの部落、長沢家だけど、長沢家が二つに分裂してるんだ。その当時、セイジロウ大尽、キンピョウ大尽か、だ



からえらい財閥だったって。とりしまったん。そういう話聞きましたよ。

## 赤堀の大蛇

(かみつるがや上鶴谷)

これは赤堀の話だけど、赤堀の大蛇が赤城へ登ったなんて話聞いたことがあるんですね。蛇が通ったんだか何だかわかんないんだけど、田んぼへね、稲の苗をおこしていたわけ。

そしたらその稲の中を広くこうずーっとつぶれて動いたあとがあったっていう話があつて、これは大蛇が赤城へ登ったんじゃないかなんていう風な、まあ見た奴はいねえんだっていうけど、そんなこと噂になったことがあつた。

## 【補遺】

にゆうじょう  
入定塚

(八幡)

ここでは、今回の調査で録音状態が悪く、文字にするところが困難だったものに、予備調査（一九八四年三月二八日～三〇日）で採話されたものをおさめました。そのため、かなり修正を加えており、あらすじになっております。そのところをお断りしておきます。

なお、「飴を買った幽霊」・「娘の知恵」・「猿むこ入り」の三話は、本橋与志さんが原稿として書いてくださったものです。

昔、ある人がカゴか何かに乗って、高い木の上に吊るさせ、鐘をたたいていた。そして、

「その音が聞こえなくなったら、地下に埋めてくれ」と、人々に頼んでおいた。

鐘の音が聞こえなくなると人々は、そのカゴを埋めた。今でもその埋められた場所は、入定塚と呼ばれ、カゼなどの病気をなおしてくれるという。大間々町との境にある。

### 【参考】

「入定塚の由来」の碑文より

へ・・・八幡の旧桐生街道と銅山街道と交叉する処を二重坂と言ひ、左衛門入定の地と伝えられる。彼は、新川皆戸乗原浜吉氏の先祖ともいい、乗原氏宅に寄寓していた者とも言われる。伝説によれば、入定の日、白装束にて棺に入り地上へ竹筒を出し僅かに空気を通ず。入定後、暫くは

念仏の鉦の音聞こゆ。里人これを憐れみ、竹筒より水及び  
団子等を差入しが、後には却ってこれは不本意であるとし  
て、それを絶えられしに間もなく、鉦の音止みぬと。石碑  
には、光誉禅心信士貞享乙丑年二月二十四日と記される。  
このほど地主、安藤光男氏の好意により、当地を安住の地  
と定める。光誉禅心信士、地主及び地域住民の上に永劫に  
加護を垂れ給え。(昭和五八年三月吉日)建生 新里村文化  
財保護協会・・・)

米ときばばあの話

(下武井)

ジ(ウズナ)という場所の小川に、米ときばばあが出没す  
るといわれる。

きつね火

(赤城山)

若いころ、夜、山に火が見えた。それは、きつねが尾を  
すりあわせているのだという。特にきつねの発情期(秋ご  
ろ)に多いという。

歌よみ

(赤城山)

35

ひょうきんなじいさんがいて、

「酒飲みが、酒飲めば 心大きく晴れ晴れと借金とりが

うぐいすの声」

と詠んだ。

こわい夢

(板橋)

猟師をしていたおじいさんが、ムジナをいぶしているうちにがけのたいへんな所に立たされてた夢をみた。

夜、爪を切ってはいけない話

(板橋)

昔は、松の油であかりをつけていた。夜、爪を切ると飛び散った爪がその中に入る可能性がある。爪が燃える臭いをかぎつけて蛇がやってくる。(蛇は、爪の燃える臭いを好む)だから、夜、爪を切ってはならない。

オカメ桜の由来

(上鶴谷)

以前は、お藤桜と呼ばれていた。お藤とは藤原秀郷の妾であるが、彼女がその桜を見に来て、その桜があまりに美しいので、そこで舞を舞った。

(オカメの意味は不明)

ムジナに化かされた話

(上鶴谷)

奥沢から、薪を切りに、小じよ(小昼飯)飯を持ってくるとムジナが一緒についてきた。その小じよ飯を食べたら、その男は具合が悪くなった。

きちほうし様

(奥沢)

新川にっかわに、大墓場がある。その近くにわらぶきの家があり、神様が祀られている。

夜、自分が数人の仲間と夜回りに行くと、道に四歳ぐらいのおかっぱ頭の女の子が、ニタニタ笑って立っている。(ただし、下半身は見えない) みんなで、おばさんの家に逃げ帰ったが、おばさんに言われてもう一度外に出てみると、まだいた。今度は、おばさんも連れて外に出たが、今度はいなかった。

後で祖母に聞いてみると、それは「きちほうし」という子供好きな神様なので、遊んでやるとよいという。この神様が出るときは、必ず大墓場の近くのわらぶき家の格子戸がはずれているという。

ムジナに化かされた話

(奥沢)

夜、ムジナに化かされることがある。実際に化かされた人もいて、奥沢から大間々へ帰るのに、別の方向へ歩かされていた。

タバコを吸うとムジナは離れる。

雨乞いの話②

(山上)

昔、雨乞いをするとき、山上のお寺にある竜骨を、沼の上でひき回した。

あるとき、そのように雨乞いをしていると、急に大雨か雷が落ちてきた。みんな竜骨を置きっぱなしにして逃げしまった。

ところが、足の不自由な人が、どうやったものか、一人

で重い竜骨を持ち帰ってきた。

きつねの話

(山上)

庚申様の由来

(山上)

天から神様が下ってきて、どっちの道に行くかみんなで議論が始まった。

「こつちだ！」

一人が、すごく大きな声を出し、みんなが耳をつつぷした。すると、顔が赤くなり、鼻が高くなった。これがお天狗様である。

だから、庚申様は神様であって、神ではない。

買い物をしに、そば畑を通って行った人が、洋服をはしよって畑の中で、

「この沼は深い、ああ疲れた」

といって、這い上がろうとしている人がいた。これは、きつねに化かされたのだ。

キツネの嫁取り。ちょうちん行列が現れ、人が行くと消えてしまう。

きつねに化かされた話

(高縄)

大間々<sup>おおま</sup>まで買い物に行くときに、暗く寂しい山道を通って行くが、ある人がそこを通過してきつねに化かされ、帰ってくると寝込んでしまい、

「油揚げ、油揚げ」

と、うわ言をいう。

「油揚げが流しの下にある……」

というので、捜すと本当にあり、化かされた人は、それを食べてしまったという。

飴を買った幽霊

(山上)

昔、ある村にお祭りがありました。一週間も続く大きなお祭りです。神社の境内には、いろいろなお店が並んでいました。飴屋さんも何軒もありました。

夜が更けて、みんなが店をしまいましたが、一人のおじいさんは店をしまおうとしません。おじいさんの店には、一人もお客が来なかったのです。飴が一銭も売れなかったのです。

しかし、もうみんながしまつて帰ってしまったので、おじいさんも仕方なく店をしまおうと思っと思っていますと、そこへ、

「今晚は、飴をください」

と、一人のとてもきれいな若いおかみさんがたっていました。おじいさんは驚きましたが、

「どうもありがとう」

と言って、飴の包みを渡しました。おかみさんは、飴の包みを受け取ると、どこともなく帰って行きました。

それから毎晩、一週間同じことが続きました。七日目の晩、おじいさんは不思議に思い、おかみさんの後を、そつとついていきました。するとびっくりしました。大きな墓地の中まで来ると、いつの間にかおかみさんの姿が見当たらなくなっていました。おじいさんがいくら捜しても見えません。そして、何処からともなく赤ちゃんの泣き声が聞こえます。

おじいさんは、ますます不思議に思い、赤ちゃんの泣き

声のする方へ行きますと、そこはまだ、新しい土盛りのお墓でした。

おじいさんは、恐ろしくなって後も見ずに、逃げ帰りました。翌日、寺の住職に話をしました。すると住職は、

「そう言えば、一週間前に妊娠した女性が 身投げして死んだ墓地だ」

と、いいました。

その後、墓地を掘ったところ、赤ちゃんが生まれていて、おじいさんから買った飴の包みがそっくりあったそう。

## 娘の知恵

(山上)

昔、ある村に 大きな蛇が出て来ては 作物の上をのたくり廻って 作物をいためてしまい、村の人々は 困り切っていました。

ある日、庄屋さんの家に集まって、みんなで相談をしましたが、なかなか良い知恵が出ませんでした。すると、庄屋さんが、

「誰か、あの悪い蛇を退治したものには、好きなものを与えよう」

と言いました。すると一人の娘が、

「私が退治しますから、針を千本用意してください」

と言いました。村人は娘に針を千本渡しました。娘は、着物を着てきれいにお化粧をすると 針を千本持って、蛇の住んでいる沼の端へ行きました。すると、沼の中から大きな蛇がたくさん現れ、

「俺の嫁だ、俺の嫁だ」

と、娘の方へ寄ってきました。娘は、持ってきた千本の針を蛇めがけて、投げ込みました。すると蛇は たちまち沼の底へ沈み、二度と姿を見せなくなり、村では たくさん作物が実るようになりました。

そして娘さんは、庄屋さんの一人息子と結婚し、幸せに



なったとき。

猿むこ入り②

(山上)

昔、あるところに 一人のおじいさんと三人の娘がいました。ある日、おじいさんが田んぼへ行ってみると、おじいさんの家の田んぼは 水がちつとも無く、稲が今にも枯れそうになっていました。おじいさんはすっかり困ってしまつて、田んぼのふちに腰を掛けて大きなため息をついていました。すると、そこへ一匹の大きな猿がやってきて、

「おじいさん。何をそんなに心配そうな顔しているの」と聞きました。おじいさんは、

「うちの田んぼばかり、水が無くて 稲が枯れてしまう。なんとか水をかける方法はないかなあ」

すると猿が言いました。

「おじいさんちの娘を一人、わしの嫁にくれたら 水をかけてやる」

と。おじいさんは、喜んで娘を嫁にやる約束をしました。すると見る間におじいさんの田んぼに水が一杯になり、稲がすくすくと大きくなりました。

しかし、おじいさんは困ってしまいました。猿のところへ嫁に行くと娘にいったところで、返事をするはずがありません。おじいさんはどうしたものかと心配のあげく、とこについてしまいました。

一番大きい娘がおじいさんの床のそばに行き、

「おじいさん、おかゆでも食べますか」

と言うと、おじいさんは、

「何もいらぬから、猿のところへ嫁にいつてくれ」

と言いましたが、娘は怒って出ていきました。

二番目の娘がおじいさんの所へきました。同じことでした。三番目の娘は、心の優しい娘でしたので、おじいさんから話を聞き、かわいそうに思いました。そして、

「私が行きます。もち米を二升持たせてください」

といいました。おじいさんは大変喜んで、病気が治ってしまいました。早速、もち米を二升用意して猿のところへお嫁に行きました。

二日目になりました。猿と娘は、おじいさんの家へお客に行くことになりました。娘は、

「おじいさんはお餅がすきだから、餅について持って行きますよう」

猿と一緒に餅をつきました。娘は、

「お重箱に入れると重箱くさくなるから、臼に入れて持って行こう」

と言いました。猿が臼を背負っていきました。

しばらく行くと、深い川の端に大きな柳の木がありました。娘が言いました。

「おじいさんは、柳のコロコロがとても好きだから取って行きましよう」

「餅を草の上に置くと草の匂いがうつるから、背負った

まま登ってください」

と言いました。猿は臼を背負ったまま、柳の木に登りました。娘は下から、

「もう少し上よ、こっちよ、あっちよ」

と言っているうちに、猿は重くなり細い枝にいったものですから、枝が折れて深い川に落ちて、臼の下になって死んでしまいました。

娘は、おじいさんのところへ帰り、また仲よく暮らしたとき。

新里村の民話 (話者と題名)

※カッコ内は、話者の居住地区名

(赤城山) 深沢酉造

きつね火 . . . . .三五

歌よみ . . . . .三五

(板橋) 高橋さんのおばあさん

小沼伝説 . . . . .一五

百足と蛇の争い . . . . .二六

きつねの仕返し . . . . .二八

ちょうちん行列 . . . . .二九

(板橋) 登山正男

こわい夢 . . . . .三六

(板橋) 蕪木清作

夜、爪を切ってはいけない話 . . . . .三六

(高泉) 新井しげる

三びきの蝶 . . . . .一一

むじなつき . . . . .三二

正直者の話 . . . . .三二

(関) 長沢一二三

家の祖先の話 . . . . .三二

(大久保) 北爪さう

小沼伝説 . . . . .一三

(上鶴谷) 瀬谷藤太郎

赤堀の大蛇 . . . . .三三

オカメ桜の由来 . . . . .三六

ムジナに化かされた話 . . . . .三六

(奥沢) 小野里得郎

小沼伝説 . . . . .一六

弘法水 . . . . .二六

(奥沢) 金子ゆき子

きちほうし様 . . . . .三七

ムジナに化かされた話 . . . . .三七

(山上) 本橋与志

猿むこ入り① . . . . . 八

屁ひり女房 . . . . . 一〇

娘の蛇退治 . . . . . 一一

小沼伝説 . . . . . 一四

小山の由来 . . . . . 二二

忠治の首を洗った井戸 . . . . . 二二

小豆ばばあ . . . . . 三一

飴を買った幽霊 . . . . . 三九

娘の知恵 . . . . . 四〇

猿むこ入り② . . . . . 四一

(山上) 長沢平八

八丁じめの御利益 . . . . . 二四

きつねの嫁とり . . . . . 二七

茶釜ころがし . . . . . 二九

雨乞いの話① . . . . . 三〇

雨乞いの話② . . . . . 三七

庚申様の由来 . . . . . 三八

(山上) 須永利隆

小沼伝説 . . . . . 一七

関の瀧興寺の猫の踊り . . . . . 一八

竜源寺裏のむじな伝説 . . . . . 二〇

山門の御札 . . . . . 二一

(山上) 渋谷富三雄

きつねの話 . . . . . 三八

(高縄) 渋谷大治

きつねに化かされた話 . . . . . 三八

(下武井) 岩崎一夫

米とぎばばあの話 . . . . . 三五

(鐺木) 鐺木多け寿

小沼伝説 . . . . . 一三

(鐺木) 話者名不明

善昌寺七不思議 . . . . . 二七

(八幡) 井野頼次郎

小沼伝説 . . . . . 一五

羽天狗善兵衛 . . . . . 二三

入定塚 . . . . . 三四

(藤生沢) 深沢佳男

小沼伝説 . . . . . 一二

【※】 題名が同じものは、①が本調査時の採話、②が予備調査時の採話です。

## 民話探訪を終えて

### 【みちくさ（小豆ばばあのこと）】

龍の子太郎が、山のばあさまに、「小豆ままの握飯にぎりめし」というものを作ってもらいました。なんとなくお赤飯とは趣を異にするそれが、私にはとても羨ましかったのです。それで、小豆とぎばばああずきの噂を聞いたときに、小豆をといでくれたのが嬉しかったのです。彼女は、小豆をといでいるから魅力的なのだと思います。

近親に、お米をとぐのもいるらしいのですが、お米では、つい、昼間はお洗濯もしてしまいそうで、間違っても食べられないとは思えなくなってしまうとは思いませんか（小豆ばばあになら、食べられてみたいなど思っているわけでは決してありませんが）。

ところで、この小豆ばばあのお話は、だいたい、夕方過

ぎて楠木川のあるところを通ると、小豆ばばあに連れていかれるから、行ってはいけない、というものなのでした。警戒が、生存の一要件であって、また、団体生活の提供する一大便宜でもあった頃、悪は、根絶することこそ難しいけれど、努力を怠らない限り、その害から逃れることができると思われておりました。

今では、こういう考えは流行りません。川自体が、立札くらいでは、まかないきれないほど危ないのなら、直してしまえば良い。暗いのが怖ければ、灯りをつければ良いし、小豆ばばあが人に危害を及ぼす可能性があるならつかまえて（人間でなければ）殺してしまえばよいのです。

実際には聞けませんでしたが、本当に小豆ばばあをつかまえる計画をたててしまうお話もあります。（上州の民話第二集未来社）このとき、小豆ばばあは、ひょうげた安吉つあんを代わり身にたてて、どこかへ行ってしまいました。現在、小豆ばばああずきのいたあたりに埋められてしまったそうです。彼女はどこへ行ってしまったのでしょうか。我が身

はどうなってもいいから、一度でいい、小豆をとぐ声を聴きたい、というのは無責任なわがままにすぎないのは知っています、すこしばかり切ない今日このごろなのです。

### 【みちくさ（昔話と伝説）】

新里村で採話することのできた話は、小沼伝説が主で、昔話の数はそれほど多くありませんでした。ところで、この伝説と昔話とは、どこがどのように違うのでしょうか。一般に昔話の特徴としては、次のようなものがあげられています。

- ① 語りはじめと語り終わりの言葉がきちんとあつて、この話は、現実の世界とは異なった世界の話である、ということとを強調する。
- ② 内容では、人が簡単に変身したり、動物がしゃべるなど

現実性が低い。

③ 導入、盛りあげ、結末の部分がはつきりしていて、ひとつの完成された作品となっている。

④ 特定の地域、人物との結びつきは弱い。

これに対して伝説は、以下の

① 実際にあつたこととして語られる。

② 内容では、こんな不思議なこと、こんな不気味なことがあつた、ということ述べるのに力点がおかれる。

③ 時代、場所、人物名が明確に述べられ、またその話が真実であるということの証拠として、現実の鉱物、湖沼が存在する。

④ 現実的な話で動物が話したり、人が変身したりすると非常に驚く。

昔話や伝説の研究が最も早く始まり、また盛んでもあるヨーロッパでは、この両者の区別が比較的容易です。しかし、日本の場合は、昔話と伝説の区別ができないような話がたくさんあります。伝説に近い昔話が多いからなのです

が、このような傾向は、エスキモーやインディアン、アフリカの民族など、未開地の民話によく見られるのだそうです。

【みちくさ（勢多郡の雨に）】

雨の日に、いつの間にか周りが夜になっていたりすると、つい、アイスクリームなど買い求めたりして、この世界とのつながりを確かめたい、と思うときがあります。たかがアイスクリームと思う方もおありでしょうが、そういう人は、雨を待つてコンビニエンスストアまで出掛けてみてください。い。（新芽がひとつくらい、何かの香りが残っています。）

民話を、わざわざサークルの部屋のたたみの上まで持つて来てみたいと思ってしまうのも、やはり、まだ夜は明る

くない、という事実を感じているからなのです。もしかすると、小豆ばあが雨の中を渡り歩いているかもしれない……

雨の朝と夜の間の国鉄の駅。動きはじめた髪の毛の形は、いつの間にか、しゅくしゅくしゅくしゅく……という音を響かせて、黒いろうそくが燃えるときのように、闇をひろげていくのでした。人間に半分以上あいそをつかせながら、それでも人のいないところでは生きていけない、小豆ばあは、この日、一大決心をして中央線に乗り込んだのでした。本当は、小豆ばあは恐ろしすぎるほど恐ろしい妖怪です（人間に食欲を感じられるのです）。

雨の話は昼間にもどします。私にとって最後の調査の日に、雨が降りました。勢多郡の雨は霧を呼んで、ゆつくりと山を包んでいきました。バスの時間や小学生たちにまじって一瞬、炭酸がはじけました。今では、アスファルトの道路を、猫が横切ったような気さえしています。

「夢のしゃぼんを追いかけて、それで一生を終えたいと」



毛布はいつかはほころびるけれど、全部を容れた風景

## 編集後記

でした。無理に紅茶の茶碗に仕立てたいなどは思わない  
ふりを装ってみたりもしています。まだ、すこし舞いあが  
っているのかもしれませんが。もし、意味不明なところがあ  
ってもどうか許してください。ありがとうございました。

赤城山のふもとにある新里村では、さすがにそこと関係  
の深い「小沼伝説」が、ほとんど言っていないくらい、多  
くの人から聞くことができませんでした。その他のお話は、それ  
ほど多くは聞けませんが、しかし、それはそれで私  
たちに、なぜ昔話があまり語られていないのか、という新  
しい課題を提起してくれました。

民話は、それほど聞けませんでした。新里村の皆さん  
が、あたたかく迎えてくださったことは、私たちにまた別  
の何かを与えてくれたようです。

録音テープから文字に直していると、話をしてくださつ  
た方、一人一人の顔が浮かんできて、私たちに力を貸して  
くれたように思います。

採話にあたって、御協力くださった皆さんに心からお礼  
申し上げます。

【民話分科会名簿】 民話採話調査担当者

教育学部三年 石川千春

文学部 三年 栗原良恵

教育学部二年 宮木裕一

ほか四名

『新里むかし』

(群馬県勢多郡新里村の民話)

一九八四年(昭和五九年)十一月一日発行

【発行者】 千葉大学日本文化研究会 民話分科会

【発行所】 千葉大学日本文化研究会

リポジトリ公開用覆刻版

『新里むかし』

(群馬県勢多郡新里村の民話)

【覆刻版発行者】

千葉大学(旧) 日本文化研究会民俗資料編纂室

代表 日本文化研究会初代会長 加部恒雄

【覆刻版発行日】 二〇一九年十二月二日

<https://doi.org/10.20776/106362>